平成４年３月１０日発行

鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが　故里

第　６　４　号

内容　　鵠沼と芥川龍之助　　田中まさ子
魚林さんこと、清水佐太郎さん一代記　　取材記録

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（昭和 8年刊）で、”くくいぬま”と読みます。これは鵠沼の地名なのです。

鵠沼と芥川龍之介

田　中　ま　さ　子

〔解説〕鵠沼海岸を訪れる人々は、引地川の河口から江の島を眺め、富士山をそして伊豆の山々を遠く望みながら、白波の砕ける緩やかな砂浜の曲線をめで、静かに松林を散策したものです。過ぎ去った遙か昔、芥川龍之介も体を病みながらも、この鵠沼の海岸を散策したことでしょう。田中まさ子さんは、「このことをを想像するだけでも、文学少女だった私の見た龍之介の最後の光景が現つのものとは思えない。」こう述懐なさって次の四編の原稿を私に郵送してくださいました。

芥川龍之助は現在ともすれば忘れ去られ、なかなか人々の口にはのぼらないようです。しかし、いっぽう芥川賞は連綿として毎年の話題を提供しています。この賞は昭和10年に創設され、最も伝統のある文学賞として存在しています。彼の親友の菊地寛が芥川賞と直木賞を作って後、その受賞作は天下に公表され、脈々と新人作家にとつての輝かしい文学登龍門として長い伝統を築きあげてきました。しかし、芥川賞だけが商業的にも一人歩きしてしまっていると感じるのは私だけでしょうか。

ここに田中さんのご希望に応じて、芥川龍之助を「鵠沼を語る会」にて追憶させて頂きます。たまたま今年は、芥川生誕１００年に当たります。各地で催しがあるでしょうが、鵠沼では亡くなる直前の滞在地として龍之助を回顧するものです。　　吉田記す。

その１．

戦争によって色々なものを失ったが、自分の書いた、読書の感想文、今の私には一番惜しまれるものの一つである。

幼い頭で書いたのであろうが、その時々に読まれた感激は忘れられない。

鵠沼と芥川龍之助はいつか遠いものとなったが、今「悠々荘」を読めば、鵠沼海岸が昔のまま、鮮やかに私の頭に甦ってくる。故富士先生も話されていた。「楽々荘」がそれである。海岸駅の近いあたりの松林、疎らに建っていたハイカラな別荘、その辺りで龍之介は友人の斉藤茂吉、土屋文明と語りながら歩いていたのだろう。又、「蜃気楼」を読めば、

海岸の砂浜、潮風が眼のあたりに広がる。引地川、東家の土手の辺りを龍之介は妻の文と散歩したり、橋を渡ったり、O君とある友人等と随分楽しげに鵠沼で暮らしていたのだとここのところを読むと、龍之介は鵠沼では幸福な日々であったと私には思われる。親友の菊地寛、久米正雄、その上に夏目漱石先生がおられたのだ。なぜ、死んだのだろう。解らない。また、手元にある作品を読んでみる。作品の中に私は、一つのものを感じた。それは「ものかき」の悲しさ、この想いが随所に出てくる。龍之介の俗に言う「本音」ではなかろうか。

平成３年１２月６日、私は鵠沼公民館で龍之介の姪御さんにあたる葛巻左登子さんにお会いすることが出来て、私の知らない芥川家のこと、妻・文のことをお聞きすることができた。葛巻さんは、龍之介を「叔父様」と言ってとても可愛がられたそうで、いまに残るただ一人の血縁の方である。この方の見た龍之介一家の歴史は新しくなると思う。

その２．

今日私は、芥川の「或旧友へ送る手記」を読んだ。これは大変なものを「語る会」でとり上げてしまったものと一寸悔やんだのだが、なんとなくせかれるような思いで書き出した。

この作家の純粋さ、人生、芸術に対して余りにも良心的なものが死に結びついたのだろうか。

その頃、私は、田舎からポット出の文学好きな少女であった。麹町三番町の春秋社へ出入りをしていた時、田中直樹に聞いた「きき書き」であるが、印象深く忘れられない。

７月２４日の早朝、芥川の死を知らされて、菊地覚と共に春秋社の社員である田中は駆けつけた。妻の文が気付いた時は、すでに亡くなっていた。急を聞いて旅行先から駆けつけた多くの友人や弔問客の人達で大変な騒ぎたった。葬儀は三日後で、当日の朝大勢の僧侶の読経、むせるような香煙の中に、最後の名残りと棺の蓋を開けて見た瞬間、「アーッ！いけない。」と大きな声でさけんだ。棺の蓋は再び閉じられた。なかの死面はすっかり変わっていたのだった。棺には釘が打たれ、近親者だれも見ることはできなかった。・・・

その時、覗いて見たのは画家の小穴隆一と田中直樹の二人だけだった。葬儀は午後3時から谷中で行われた。会葬者は七百余、友人総代の菊地寛は涙で絶句して弔辞を読みすすむことができなかった。あとで私が見た小穴隆一が描いた「デスマスク」は、やわらかな顔であったので私はホッとした。

さて、「鵠沼と芥川龍之介」をもっと知りたい。鵠沼に住まって、清らかな海の空気を吸って、朝夕この海沿いの道を散歩したであろう。やわらかな風光、人情に、痛んだ神経が安まる日々もあったろう。富士先生も近所の人もみんな親切だった。

〔注〕文中、田中直樹とは、その後結婚されたまさ子さんのご夫君です。

その3

私の若い日の記憶は、大分薄れてしまった。だが、芥川龍之介の自殺は、そのショックは、余りにも若い日の私には強いものだった。古いノートをやっと探し出して読んでみる。

どこで私が読んだのか、こんなことが書いてある。

龍之介は生後九ヶ月ごろ、母フク発狂のため、母の生家芥川家に預けられた。・・・年譜を見て書いたのかもしれない。

明治25年に生まれている。とても、複雑な家系である。・・・今日は私の体調が悪いので、体調のよい時調べてみる。・・・

大正15年（35歳）1月、この月の中旬から翌月中旬まで、一箇月余り湯河原で神経衰弱と胃の療養、4月下旬から5月下旬まで、鵠沼に転地し、続いてこの地に居住し、文芸春秋社に連載を書く。鵠沼には、昭和2年2月まで住んだ。昭和2年1月、「蜃気楼」は鵠沼の海のことを書く。（36歳）死の影が見え始める。3月「河童」を改造に連載。5月下旬に宇野浩二が精神状態異常に陥った。ために芥川はいよいよ神経の疲労が昂じて変になったのを周囲の人は知っていたらしい。7月10日、遺稿「西方の人」、7月23日「続西方の人」脱稿、9月改造に掲載された。7月24日払暁、田端の自宅で睡眠鎮静薬の致死量を飲んで自殺、35歳 5ケ月弱であった。妻の文や友人、菊地寛、近親知己への遺書の他「或旧友へ送る手記」があった。遺言により、岩波書店から刊行された全集八巻はいま手元に無く、おぼろげな私の記憶では、またゆっくり思い出されたら書こうと思う。菊地寛の弔

辞はぜひ書いておきたいものと思っているが、これも手元に見当たらない。とても残念である。

その４．

「鵠沼を語る会」の会員もいつしか年をとった。私もいつまで生きられるか判らないがまだ書いておきたいことが沢山ある。

今年（平成３年）は富士先生が亡くなられて、あゝ残念。お聞きしたいことが、一杯あったのにと思った。それは鵠沼にある一時期住み、精神病症状で富士先生の診察を受けた芥川龍之介のことである。あれは昭和２年の７月のことである。暑い夏、龍之介の自殺が報じられた。私はまだ少女の頃で、文学をやるのだと東京に出て、親を悩ませていた頃で芥川のものはよく読んでいた。突然の自殺に驚いた。新聞で知るのみであったが、実に感銘深いものだった。それは菊地寛の声涙下る長文を今も覚えている。龍之介はよき親友を持たれた。菊地寛、久米正雄、白樺の同人達、今その人達は亡くなり、芥川文学は残っている。鵠沼のプールで泳ぐ芥川を見て、ゾーッとしたと書かれた今井達夫さんも、富士さんも亡くなられた。

今日、葛巻義敏氏の編集された芥川未定稿集を読んで、鵠沼の芥川の生活を偲んだ。又塚本文に宛てた龍之介の手紙を読んで龍之介の青春を見た。

田端の家に住んだ当時のこと、「語る会」の会員のなかで、もっと昔の文士の生活を書いてください。鵠沼での生活も知りたいのです。私は足が悪くて調べられませんから。

その１からその４迄

お　わ　り。

魚林さんこと清水佐太郎さん一代記

吉田興一

この文章は、平成3年8月2日の真夏の盛りに、「語る会」の遠藤・川上・野口・私の4人が魚林さんを訪問して、親しく取材した時の記録です。

§ ご紹介

私は、今年80歳になったが、一生曲がったことは大嫌い。ちょつとつむじ曲がりだから、勘にさわることを言うかもしれない。私は、水泳の達人なんだ。この年になるまで、14人を救っている。こんなに表彰状をもつている魚屋はどこにもいないよ。

§ 生い立ち

私は10歳を越えた頃から、父親から継いだ魚屋をやつてきました。父親が長く患い、とうとう食べるものが無くなってしまった時代があり、私が働かなければ、一家の者が食べていけなくなった。11歳のときです。だから、朝学校が始まる前に魚を売ってあるいた。売る場所としては、腰越に津村という農村があり、そこで売って歩いてから、学校へ通った。そのため、1時間でも2時間でも遅れてしまうことが多かった。

幸い母親の従兄弟が鎌倉師範を出て、この腰越の小学校で教鞭をとつていた。学校で遅れた分は、教科書を下宿先に持って帰って教えてくれた。その一人は小田原の新名高校の校長をしたし、もう一人は松田の教育長をして、今は辞めている。そのように、学校は満足に出ていないが試験には出て大正15年には卒業できました。この鵠沼の高砂（現在の店のある所）については、小学校を出るとすぐ調べてみた。当時、腰越の魚市場には、500人か

清水佐太郎さんの近影

らの魚屋が集まっていた。その中には、相模原から浅溝、上溝あたりの魚屋までが来ていた。いろいろ話を聞くうちに、高砂という所には、偉い人ばかりが沢山住んでいる。非常にいい人が住んでいると子供心に聞いて、この土地を選んで偵察しましてね。何処にどんな魚屋がいるとか、地元をよく調べてみた。今の魚屋は、正直な人が多いが、その頃の魚屋の若い衆には一流の悪い奴ばかりで、殴ったり殴られたり、取った取られたで、乱暴だった。命のやりとりまでする。漁師は金使いが荒くて儲かるとすぐ使ってしまう。そしてシケると3日も4日も金が入らない。こんなことやつても仕方がないっんで、親父が陸に上がって　しまった。腰越の市場に魚が集まったのは、昭和2年までで、釣り舟の漁師のいる漁師町だった。私のとこにあった漁具は市役所にいってます。博物館が出来たら保存するよう私の名で渡してある。昔は、この海も10月になると、マグロがとれた。マグロは舟のまわりに来ると金色に光る。その頭を狙って銛で突くんです。うちは網元をやっていて、舟は二はいあった。昔は沖でシケに会うと収入なし。生命が怖いから魚屋になった。そして、人一倍仕事してきました。6年前、74歳のとき、鵠沼には有名なトッサンがいるってね、朝日新聞から記事をとりに来た。その後、読売もやって来た。その記事は大切に保管してあります。

私は大正15年からここにいるんですが、当時は、まず第一に勧業銀行の山田さん、日本鋼管の重役の香田五郎さん、皆中堅であるけれど、いい人ばっかり。横浜銀行に用のない時分だったが、支店長は高松さんの山の上にいた高瀬五郎ね。それらは皆私のお得意さんでした。みんな腕づくで取った。昭和12年に私は長男だったけれど、親父のものは一銭もいらないといって、店を出した。私のいた元の古い家は、広田さんが外務大臣で住んでいた家、大曲りの所のね。私は200 円で買った。それを壊してもらってこちらに移った。いくら働いても、働いても儲かんない。魚屋っていうのは、そんな商売。いや、本当なんです。しかし、神奈川県で一番いいお得意を持っているんです。この私は。鎌倉の二階堂がいいの、大磯がいいの、逗子桜山がいいのって言っても、私にはかなわない。とにかく最高のお得意を持っている。商売もよくしたが、また、よく可愛がられました。私はこんな気性、休みが嫌いなんだ。定休日がない。 365日働いてるのが気持がいいんです。お客には迷惑かけないんだと、「家には定休日はないんだ。」と働いた。私の元の店ってのは、

松が岡にあった。夏になると、若い衆が4 ～ 5人来ていた。海岸のいいお屋敷は全部私のお得意ですよ。幸せだった。海岸の渡部さん、小田柿さん、柴田さん、高島さんとか、柴垣さんは　民政党の代議士の家ですよ。今の市長の葉山さんのお祖父さんも。草葺屋根の凄い家だったよ。

私がここに来たときは、藤沢駅に汽車がとまるのが見えたんです。それ程家が無かったんです。駅まで砂の道路だった。桃の畠には、花見どきに人々が沢山きたものです。海岸からここに来る道筋には全部ナスやらスイカの畑でした。この辺りを開いたのは、高瀬さんで、江ノ島水道を引いた人ですが、この人が元祖です。それで、安部さんを呼んだり上郎さんを呼び、だんだん住む人が多くなつた。私がここの南橘の町内会長になったときは300 軒しかなかったが今 640軒もあります。この南橘となったのは、橘町がさきに有って区画整理があったとき、南橘町と付けたのです。橘という字は私がとったんだ。この場所は当時市では、鵠沼〇丁目と名付けようとした。その前は、橘通り 7丁目だったのを、鵠沼で統一する案だった。私、冗談いうなって、当用漢字で橘をとろうと言ったんです。それで南橘となった。昭和30年代のことです。いまの政界で威張りちらしている金丸信ね、あんなの鼻たれ小僧のときから知っている。この店に使いに来ている。賀来神社からこちらに来る道に、服部さんのところへ曲がってくる右側に、広瀬タメヒサって大臣がいた。山梨県出身の人。その人のカバンモチしてた。山梨から請願なんかで沢山人がくる。昔は食べるものが余りない。魚しか無いから私のとこへ取りにくる。夏なんか配達が間に合わない。それでハダシで駆けて取りにきていた。昔のことだが、親父が鵠沼で店持って、私はここで店やって、両方でやっていた。向こうが本店、ここが支店です。海岸のは主に「東屋」に入れる魚を扱っていた。今の松が岡で天金の近くの豆腐屋の隣にあったがツブして仕舞った。あそこには、源平時代に戦死者の墓場だったと聞いたからです。迷信といわれるかもしれないが。

§　昔の鵠沼海岸・・今の松が岡のこと。

あの辺りに、八軒別荘というのがあった。今の畳屋さんの所。あそこには逓信省の寮があった。水の澄んだ池があってね。戦死した武者の首を洗った池だともいう。私は散々泳いだものです。それは大震災の前のこと。その後、源平時代の戦場の跡という歴史上の事

実が判った。轟さんの細君が天金に頼まれて、大出さんという人が風呂屋をやつていたがそこが空いたので天金が店を出した。あそこは昔、服部さん、轟さん、佐藤さん、あと井上さん達が住んでいた。一方、海岸には、浅野という物凄い巡査がいた。海軍の元兵曹長だった。江ノ電の上のほうの郵便局、あの斜め 100㍍くらいのところ、井上さんのお屋敷があったとこに、駐在所があった。また、海岸には後藤さんがいた。そのこっちかたに沼間トシロウという東証の理事長がいて、倒産して三井さんに売って、その三井さんが日本鋼管に売った。それが3代目。沼間さんとこの支配人してたのが、わたしの隣で郵便局を開設した寺間さん。元警視庁の部長刑事をしていた。ここの郵便局は私の店より後に出来た。海岸の薬屋（鵠沼薬局）は、市ヶ谷さん。東京の市ヶ谷銀行を止めて、鵠沼に引きあげてきた。木下さんは、宮内庁御用の大工さん。踏切の際に、いまこぐれという料理屋があるが、あそこは殿様の久松さんのお屋敷の跡。池もあり、舟もあった。そのあと、大橋さんが買った。むかしのお屋敷には、広くてね、池もあれば、舟もあったものだ。この辺りはほとんど桃畑で、桃と桃の間に西瓜をつくり、カボチャをつくり、線路の際の斉藤俊夫（この前亡くなった）のとこなんか、全部畑だった。丸政という鮨やね、あれは私が世話した。というのは、八百徳の近く、あの奥に関根喜三郎ってポンプ屋さんがあった。その人の家を借りてやってそこに店出したんだ。小田急が敷けて駅も出来、よくなった。いい所へ出たということで、食堂になった。あそこの三代目は誠に真面目なんで私が嫁を世話した。今はほかの人がやっている鵠沼饅頭は有名だったが、あれは片瀬の饅頭に負けたからだ。昔はご用聞きで売っていた上州屋の饅頭の方がうまい。鵠沼では、ご用聞き専門でなけれゃ商売にならなかった。天秤棒かついでお屋敷を回る以外、買ってくれない。そういう上得意ばっかりだった。家の人が買い歩くということは無かった。皆待っていて買ったものです。夕方までに配達すればいいんだから、昔の方が商売はずっと楽だった。今スーパーは安くない。便利だから行っちぁう。専門店で上手にこしらえさせた方が料理は美味いんです。スーパーには魚屋で入る人もいるが、テナントで入るんじゃないんです。テナントで入れるのはデパートだけ。鵠沼商店街では誰がなんと言おうと有田商店が本当の老舗、今は四代目でこれも真面目な男なんだ。前通りの露地奥の家で芥川先生が在住なさった。もう大変古い話になった。ヤマカなどは、腰越で行商してた人や元魚屋の人が止

めて行っている人が多いんです。ヤマカの社長の親父は、腰越で漬物屋していた。甲州屋って大きな八百屋がある。この人は家筋がよくて、そこの番頭していた。甲州屋っていう人は、近衛騎兵の兵隊をしていた人で、甲州から出てきた人です。そこで苦労しながら小銭を貯めて資本を作り、金貸しを始めた。江の島の漁師に金を貸した。財を成して、その倅がヤマカの社長です。この人も関東軍にいたし、世間もよく知っている立派な人です。私の弟の後輩でね。弟は満州で亡くなっている。私は、兵隊に行ったが、除隊後幾つかの動員の度に私の名が外されていた。西川って憲兵少佐がいて、部隊の編成の度に外してくれていた。戦後、命の恩人だからとお礼に行こうと思っていたら、憲兵だったので、行方が知れなくなった。長い人生の中には、いろんな事があるんです。

§　うちの町内・橘町のこと

昭和24年頃に秩父宮が越してこられたと思う。宮様と口をきいたことがあります。さばけた方で、当時の秩父宮御用達という看板もうちにはとってあります。キチンキチンと晦日ごとに支払いをしていた。ご本人は金を支払うことなど全然知らない。請求するときは、むこうの書式があるんです。縦書きで　して、これを一枚呉れて、これを見本にして印刷して使えという。いまも残っています。注文も調理人次第でね。品物もうんと新しいものを出す。片瀬では、鈴木といって、女学校のそば、そこが一番漁をしている。網も大きいの持つている。そこから、いい魚を仕入れていた。このあたりには、いい人が沢山いた。終戦後、全部パージに引っ掛かってダメになっちゃつた。宮様のとこは、三菱の郷古潔がいたが、この人もパージ組。

うちの町内では、現在年に 4回食事会をやつている。鵠沼は、隣同士でも口をきかない。昔からだ。朝の挨拶もしないから、お付き合いがない。それじぁ困るってんで、組長10人と相談して、和気あいあいでやりたいからと食事会を計画した。町内会費は月 200円、アパートは100 円。私は無報酬で16年間町内の面倒みてきて去年で 565万円余りたまってしまった。それを費用にしょう。始めたら多くて80人くらいしか来ない。去年入ったばかりの人がくる。それで一万円の食事されては困るからと、5 年程したら参加してください。3000円は会からの負担です。老人会は年 500円こちらは 3年間据え置き、その後参加してもらう。

資源ゴミの回収制度は市の会議で私が提唱し創設された。町内の世話は大変だけど、結局は金で残る。ほかには、さきの宮様がなくなられて後、市の区画整理で宮邸の近くに公園ができました。これを町内で買って秩父公園と名づけた。子供達に喜ばれています。

私は学問はないが、町内に尽くすのが、本当の学問だと思っている。また、例の島原の噴火災害には、いの一番に義援金を出しました。この町内が最初ですよ。そして、市が大騒ぎして救援体制を敷いた。これには、訳があるんです。10年前、三陸で山火事があって漁師の村が全滅した。山から吹き下ろした風で舟が全部焼けてしまった。町内で義援金も送り、私自身では、ダンボール二杯分衣料を送ったことがあったんです。岩手県の久慈市です。魚屋だからね。恩を受けている。

沖縄にて

§ 商売のこと。

私の長い人生のこと喋りましたが、熱海で氷屋の大会があって商売のことで発表した。それが新聞に載りましてね。それをご紹介しましょう。いま、氷は売れないという。家庭で冷蔵庫で作れるからね。製氷機って便利なものがあるから。しかし、私の扱っている純氷という氷にはかなわないんです。水割り飲む人は、製氷機の氷は止めてくれという。すぐ溶けちゃうし、本当のいい氷はそんなに溶けるものじゃない。魚屋にある氷と食べる氷とは別なんです。私のは、陸用ってのを扱っているんで、漁師とか魚屋以外は売っちゃあ

いけないんです。一般には売れないってわけ。氷はね、配達する精神がなかったら売れゃしない。本当は氷を売って利益を得るなんて、こんないい商売はないんです。率のよい商売なんです。2 年前から始めたんだが、軌道に乗っちゃつてね。学校関係、会社やデパート関係などかお得意さんです。チョコレートとか、アイスクリームの販売にもなくてはならないんです。また、日本でドライアイスを扱える会社は 4 ツしかない。日本炭酸、田辺商会、吉田商会と昭和炭酸とあるんです。藤沢36万の人口で一軒しかない。相模原は65万の人口でこれまた一軒なんです。免許いるんですよ。取扱には危険はないんですが、やけどすると中々治らない。凍傷ですね。だから、手袋は放せない。

さて、商売するにはまっ先に、設備投資をしろっていうことなんです。無線電話を使えということなんです。配達の途中に連絡して注文の氷を届けさせる。なんて早い氷屋さんだってことになる。費用が 150万円かかる。それぢゃ嫌だ。そういう氷屋ぢゃ繁盛しないよ。銀行だって貸してくれるんだ。私には、10畳敷ける冷蔵庫がある。棚が沢山ある。全部、氷が入っている。安いとき買うんです。 5月から10月迄は、夏の相場で値が高い。11月から 4月末までが安い。それを買っちゃつて貯めておく。それやらなけりぁ伸びないよ。家の地下の冷蔵庫は氷が一杯ですよ。カチカチに固まっている。これをいっぺん使った人は、あとを引く。レストランとか、一度とってくれた人は、あそこのはいい氷だってずーっと注文が来る。だから、魚のほうは、店には置かない。河岸に行っても、注文の分だけしか仕入れない。どうしてもおたくの作ったのでなければ食べられないという家が7 軒ばかりある。こっちで見繕って一日おきに届けてくる。ダテに何十年も包丁にぎっているんじゃない。包丁のもっていきようが違うんだよ。ピタッと切りますよ。私のつくった”うなぎ”は天皇陛下の食べるうなぎと同じなんです。”うなぎ”はタレなんです。うちのタレは一番最初、宮内庁から持ってきたものです。それを足してゆく。それが本当のタレ。家伝のタレです。”うなぎ”を焼くのは炭火でなくてはうまくいかない。備長の木炭ですよ。金を出さないで美味い物食おうってのは無理なんです。

終わり。

「鵠沼」第６４号
平成4 年 3月 10 日発行

鵠沼と芥川龍之助
田中まさ子
魚林さんこと、清水佐太郎さん一代記　（取材）

ご注意：本紙（機関紙）の文章を引用される方は、必ず出典を明記して下さい。

編集・発行　　鵠沼を語る会

鵠　沼　公　民　館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34